

第2節 新しいライフスタイルを求めて

身近ですすむ情報化

ニューメディアに興味しんしん



暮らしのなかの情報化

あふれるほどの情報、それをうまく整理して必要なものだけ取り入れる、そんな時代だ。そのためのシステムも日進月歩。

みどりの窓口の座席予約システムや銀行の現金自動支払（ＣＤ）など、コンピューターを駆使した情報化は暮らしのなかでも進み、ファクシミリやパソコンはすごい勢いで普及している。こういった情報化を、66%の市民は歓迎している。特に男性や、20代には推進派が多い。既存メディアの低迷？

一方で、既存のメディアを利用する割合は、やや減少の傾向にあるようだ。

NHKの調査によると、家において目を覚まししている時間の約4割はテレビを見ている、というほど日本人は長い時間テレビの前にいる。しかし、55～60年の5年間で、テレビを見ている人の率、平均時間ともに減少している。このため余暇活動に占めるテレビの割合は、いぜん

として大きいものの、減ってきている。余暇活動が多様化していると言えるだろう。

ラジオも聞く人の率が減り、新聞は読んでいる人の率、時間ともにマイナス傾向。雑誌・本の場合、平日に読む人の割合は増えたのだが、

読む時間自体は減った。高いニューメディアへの関心

既存のメディアへの関心が薄らいだ分、新しいメディアへと熱い期待が寄せられているようだ。



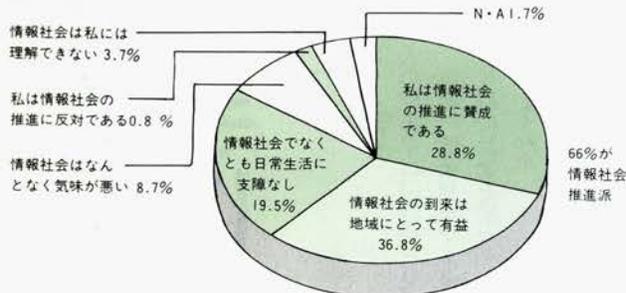
横浜市が提供している文字放送(上)とキャブテン(下)の画面。市役所1階の市民情報センターには、文字放送とキャブテンの端末が置かれたニューメディアコーナーが設置されており、いつでも気軽に利用できる。

市民データ

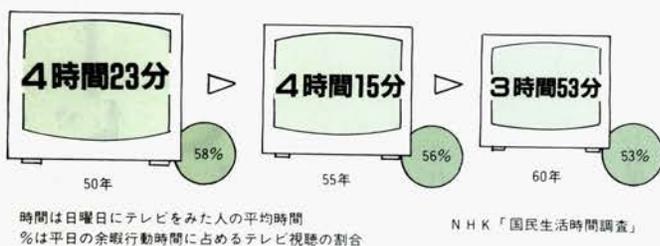
- TVKをよく視る人 16%
- FM横浜をよく聴く人 16%
- 20代に人気が高く 36%
- 広報よこはまを毎号読む人 47%
- 市民グラフよこはまを毎号読む人 12%
- 60代にファンが多く 22%
- 地域のミニコミ紙を毎号読む人 13%
- 田園都市線沿線はミニコミが盛ん 25%

Life Style

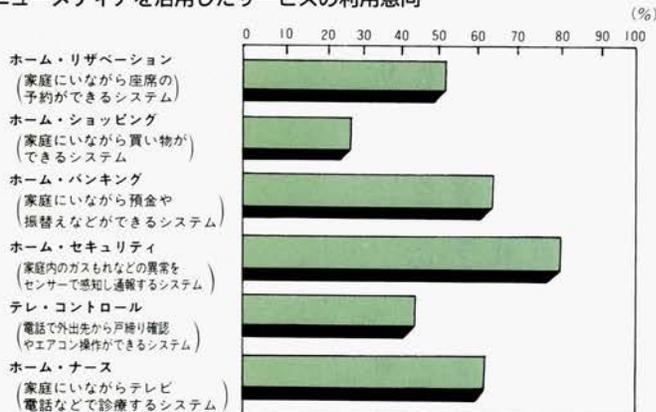
■3分の2が情報社会を歓迎



■テレビ離れ?長時間見ていることに変わりはなくが視聴時間は減少している



■ニューメディアを活用したサービスの利用意向

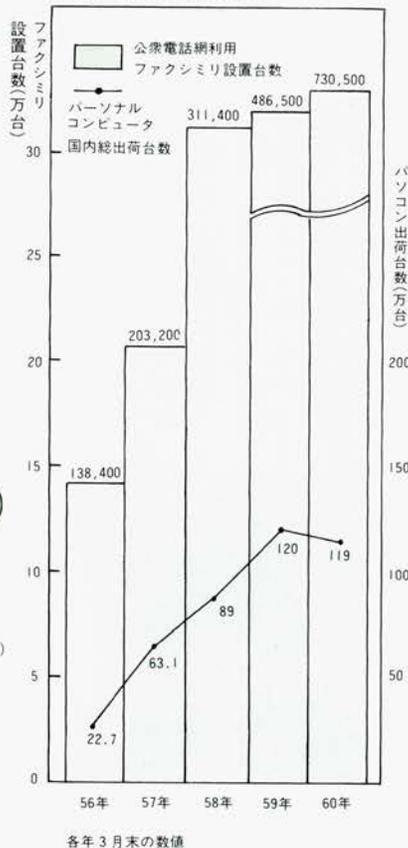


横浜市「情報社会と市民」(昭和60年度)

また、ホームセキュリティやホーム・ナースなど、ニューメディアを活用したサービスを利用したいという人はかなり多く、関心の高さがうかがえる。

若い人たちは、24時間衛星放送やキャプテン・CATVなどを取り入れることになり積極的に、情報化の波はすでに市民の家庭の中に及びつつある、とさえぞうだ。

■増加の一途にあるファクシミリとパソコン



日本情報処理開発協会「情報化白書1987」(昭和62年)

最近話題の都市型CATVは、その代表格だろう。もともとCATVは、受信障害のある地域で難視聴を解消するためにひかれた、共同受信のシステム。都市型というのはその地域を対象に、従来のテレビ番組に加えて、地域のニュースや映画などの自主放送も流す、新しいテレビ放送のことをいう。現在市内では緑区と旭区の一部で放送されているほか、中区新本牧周辺でも64年から自主放送を行う予定があるなど、ぐっと身近になってきた。市民は、こういったニューメディアに対して72%と高い関心を見せている。

ニューメディアと言われるシステムや機器についての周知度は、ファクシミリに関してはほとんどの人が知っていて87%。他のINS、キャプテン、VANなどに比べて最も実用化が進んで、身近にあるだろう。